希学園　第388回　公開テスト　小5　国語　2024年9月8日実施【模範解答】　制限時間40分

1

1 税を支〜られる（1完答）

2 誰もが

3 I ア　II ウ　III イ　IV エ（3完答）

4 I 税〜収　II 通貨

5 I 貨幣〜ない（5I完答）

5 II 最初〜いく（5II完答）（4完答 II「お金」も可）

6（記述題）

7 エ

8 B

9 X 登　Y 本　Z 原（5II完答）

10 a 協力　b 衣食住　c 手元（c「手許」も可）

2

1 a 包（み）　b 失礼　c 着信

2 A お　B か　C ぐ

3 I イ　II オ

4 ウ

5 九十点

6 エ

7 I ウ　II ア　III イ　IV エ（7完答）

8 イ

9（記述題）

10 ア

1

6 より良い社会を作るために税を負担し、集められた税はみんなのために働く人に配る（同意可）

2

9 Xでは未怜の気持ちを考えず傷つけ、一人にしてしまった今日のことを謝っているが、Yではそれだけでなく今までずっとさびしくつらい思いをさせていたということも謝っている。（同意可）

配点	
1 9・10 2 1・2	各2点×12＝24点
1 6 2 9	各6点×　2＝12点
その他	各4点×16＝64点
	100点

希学園　第388回　公開テスト　小5　国語　２０２４年９月８日実施　【解説】

1

1　指示語が指す部分に「紙幣を手に入れないと、刑務所に入れられてしまう」とあり、さらに直後に「それが納税だ」とある。これらを合わせた内容が答えになる。字数に合う部分がすぐ近くにはないため、論の展開に沿って広く探していく。

2　「円はどうなった」という問いと、◎にある「通貨」が大きなヒントになる。8で答えることになる前半の終わりの行が「こうして」で始まっており、それまでの内容をまとめたところであるのに気づいてほしい。「通貨」は「流通貨幣」の略と言われる。

3　（　Ⅰ　）の前後では「歴史の授業」での焦点と「お金の歴史を知る」上で重要なこととが比べられているので、（　Ⅰ　）には逆接が入る。（　Ⅱ　）の前後では「米はいつでも貨幣と交換できた」ので「お米を蓄えることは富の蓄積だった」と因果関係が示されているので、（　Ⅱ　）には順接が入る。（　Ⅲ　）の前後では、「国民から税を集め」、その後「税をみんなのために働く人に支払う」と複数の手順が順序立てて並べられているので、（　Ⅲ　）には並列・添加が入る。（　Ⅳ　）の後には、貨幣と米を交換できる店ができることが書かれており、その後で魚や塩、土器などを買える店についても続いているため、これらは具体例であると分かる。

4　同段落の律令時代と、前段落の江戸時代に共通することを考える。江戸時代は税として徴収されていた米がお金として機能しており、律令時代は税として徴収されていた米や綿布、絹布、貨幣が通貨として機能していたのである。後半の初めにある「昔から、税と通貨は切り離せない関係にある」にも注目したい。

5　問いかけの先を読み進めていく。貨幣の場合については「律令時代、…」の段落から書かれている。貨幣を欲しがる人は「貨幣を税として納めないといけない人たち」で、彼らが貨幣と手元の物資を交換していくことでどうなるかがさらに先に書かれている。「こうして、…」の段落でいったん話がまとめられているので、そこまでに答えがあると見当づけられる。

6　5とは逆に、「税システム」については「律令時代、…」より前で主に説明されている。「そもそも、税は何のためにあるのか」という問いかけに対する答えから、集めた税の再分配までをまとめる。貨幣が通貨として社会を循環することについては傍線部の後で述べられているので、説明に含める必要はない。

7　一行前との対応から考える。「教育」→［　⑥　］、「警察」→「警官」、「道路などのインフラ整備」→「建設会社の従業員」、「年金や医療費」→「医療関係者」という対応である。

8　前半は「私たちが円貨幣を使う理由」、後半は「税と通貨の関係」が、それぞれ話題になっている。

9　対義語は棒暗記するだけでなく、物を考えるときの枠組としても身につけていこう。

10　a「強力」と混同しないように。b　それぞれ筆順・画数が変わらないように気をつける。特に「住」は「往」とすると別の字になってしまう。c「元」を「本」「基」「下」などと区別する。「元」は、ねもと、はじまり、あたま、などの意味である。

2

1　a「勹」（つつみがまえ）、「己」、どちらも筆順・画数・とめはねはらいにまで注意して書くこと。b「失」が「矢」にならないように書くこと。c「着」は四画目と七画目を一気に書かないように。

2　A　恐れや不安で落ち着かないさま。B　様子を見ること。C　ふいてきれいにすること。

3　未怜については前書きに「二人の娘」とあることから姉か妹のいずれかであると分かる。「まだ四年生の未怜」から妹に決まる。真尋については前書きで「母の妹」と説明されていた。

4　続きに陽架の気持ちが描写されており、事情はさらに後にある「だってそれ…」の発言から分かる。アは「嫌がらせ」がおかしい。

5　後に「点がいいとか悪いとか、そういう問題じゃなくて」とあることから、未怜は点数の良し悪しについて発言したと分かる。

6　声がだんだん大きくなっていることから気持ちの高ぶりを読み取る。「そんなこと」が指すのは陽架が言った「他人が作ってくれた料理に点数をつけるのはやめたほうがいい」ということだが、なぜそれに心を乱されたのかは、後ろにある「ふつうなんてわかんない。だってうち、お母さんいないもん」という発言と、さらに後の方の「ずっと陽架ちゃんは、…」から始まる一連の発言から読み取る。

7　（　Ⅰ　）は「響いた」から、（　Ⅱ　）は「締めつけられる」からそれぞれ決まる。イ「じりっと（じりじり）」は、ゆっくりと少しずつ確実に進んだり退いたりするさまで、これが（　Ⅲ　）に入る。（　Ⅳ　）は「思い出して」で決まる。

8　直前の段落に登場する兄妹はあきらかに陽架・未怜と重ね合わせられている。アは「再び見捨てることになってしまった」が誤り。それはこの後で頭に浮かぶことである。ウは陽架と未怜の関係にふれていないため不適当。エは「遠慮しあって」がおかしい。

9　XとYのあいだにあるのは未怜の発言である。ここで陽架は、未怜がこれまでずっとどんな思いでいたのかを初めて知る。今日は料理に点数をつけることに関する指摘で未怜を悲しませ、一人で放り出してさびしい思いをさせたが、これまでもずっと、母と姉に見放されたという悲しさとさびしさを抱かせてしまっていたのである。

10　「お父さんだって、きっとわかんなかったんだよ」というのは、父が母の料理に点数をつけていた結婚生活当時のことである。ただし嫌だったのは料理に関することだけではない。前書きにもあるが、母はその当時の暮らしの端々で苦しんでいたはずである。

以　上